

‘The Challenges of University Ranking’
How can we identify the best universities in the world?

国際シンポジウム「大学ランキングの挑戦—大学の世界ランキングは可能か？」
2006年2月16日 オランダ・ライデン大学

報告 国立教育政策研究所 高等教育研究部 北川 文美

2006年2月16日にオランダ・ライデン大学において行われた、国際シンポジウム「大学ランキングの挑戦—大学の世界ランキングは可能か？」に参加した。ここでは、このシンポジウムにおける多彩なスピーカーの議論の論点を紹介するとともに、現在、研究者や政策機関において、なぜ大学ランキングに対する関心が高まっているのかを、近年の文献などを参照しながら、その背景について考えてみたい。

「ランキング」や「リーグ・テーブル」は、公的機関によるもの、商業的なメディアによるもの、大学等の研究機関によるものなどにより、その目的と性格は大きく異なる。また、国内の機関を対象としたもの、国際的なランキング、研究を中心にランク付けするもの、教育(学部・大学院)に重点をおいてランキングしているもの、などランキングの対象と内容も、多岐に渡る。たとえば、大学間の競争が激しいアメリカ合衆国において、商業的メディアによるランキングを社会的に確立したのは、US News and World Reportによるランキングであるのは、よく知られている。日本においても、メディアを通じた各種の大学ランキングが行われて久しい。¹

2004年時点で、「世界大学ランキング」として知られているものには、イギリスの新聞、Times Higher Education Supplement (THES)による The Top 200 World University Rankings

<http://www.thes.co.uk/worldrankings/>

と、大学の研究者による Shanghai Jiao Tong University (上海交通大学)による Academic Ranking of World Universities (ARWU) とがある。

<http://ed.sjtu.edu.cn/ranking.ht>

¹ アメリカ・日本の商業的メディアを通じたランキング情報の例として、それぞれ以下を参照。

US News and World Report

http://www.usnews.com/usnews/edu/college/rankings/rankindex_brief.php

「朝日新聞大学ランキング」

<http://www3.asahi.com/opendoors/shoseki/rank2006/index.html>

日本における大学ランキングについては、Yonezawa et al. 2002 参照。

今回のシンポジウムでは、この二つの世界大学ランキングの作成に関わった内部関係者 (Mr. Martin Ince, THES; Prof. Nian Cai Liu, Shanghai Jiao Tong University) がそれぞれスピーカーとして、自らのランキングの特色、方法論、課題や問題点などを語ってくれた。それぞれの発表については、シンポジウムのサイトを参照のこと。

これらのふたつの世界大学ランキングは、その目的、オーディエンス、方法論など、どれも異なっているため、両者を比較するのは困難であり、あまり意味がない。あえてそれぞれの特色を書くとすれば、THESによるランキングは、新聞という商業的メディアによるもので、読者層(消費者)として多様な集団を擁している。イギリスは、過去10年において、急速に高等教育が拡大、多様化しており、大学ランキングに対する社会と大学の捉え方もこの間に大きく変化した。THESでは、大学機関と学問分野別のランキングをしており、評価項目は、変動があるが、学生の入学時の成績、教育の質、学生の満足度、研究の質、など多岐に渡る。² 方法論は、以前から行っていた1980年代に行われた学問分野別の研究者によるピア・レビューに始まり、1990年代を通じて、次第にデータと方法論を整備してきた(Jobbins, 2002, 2005を参照)。³ 2005年の評価項目の内訳をみると、ピア・レビューによるスコア(40%)、企業のリクルーター・レビュー(10%)、教員の国際化(5%)、学生の国際化(5%)、教員・学生の比率(20%)、教員あたり論文引用数のスコア(20%)となっている。

一方、ARWUは、中国の上海交通大学にある高等教育研究所が研究を目的に行っているランキングであり、世界のトップ大学500を対象としている。そもそもの問題意識は、中国の大学が国際的に競争力を高めるための指標づくりというところから始まっている。方法論は、ノーベル賞、フィールド賞受賞数や、論文の引用数など研究領域におけるアウトプットを中心に用いた量的・統計的なものであり、方法論的に内在する自然科学系・英語圏の大学への偏りが今度の課題である(Liu and Cheng, 2005も参照のこと)。

ランキングの方法論に関する制約や問題は、複数のスピーカーによりシンポジウムでも触れられていたが、特に同名の大学の扱いや大学の合併などによる、データの処理の困難さなどが指摘されていた。興味深いのは、目的や方法論には違いがある一方で、THESとARWUのランキングの結果には、かなりの相似が見られるという指摘である(Van Dyke, 2005)。特に、大学ランキングの上位がアメリカ合衆国の大学に占められているというのは、共通の結果である。

そもそも「大学の国際化」の問題と、「大学の世界ランキング」の問題との間には、どのような関係があるのだろうか。おそらく、グローバルイゼーションや国際化といった、多くの大学が直面する環

² ちなみに、THES 2005年のランキングを見ると、日本の大学では、東京大学(16位)、京都大学(31位)、東京工業大学(99位)、大阪大学(105位)、名古屋大学(129位)、東北大学(136位)、広島大学(147位)、北海道大学(157位)、神戸大学(172位)、昭和大学(198位)がある。

³ 2004年に用いられた項目は以下のとおり(Jobbins, 2005)。

- 入学時の成績(Aレベルのスコアに基づく); 学生と教員の比率; 教育の質に関する評価の平均値; 研究評価のスコア; 図書館とコンピューター関係の支出; 施設に関する支出(学生ひとりあたり); コース終了の効率性; 学位の成績; 卒業生の進路・就職率

境の変化に伴い、世界的に一般的なランキングへの関心が高まっていることと、各国の政策や個別の大学の機関戦略において、ランキングに関する認識が高まっていること、のふたつのレベルが考えられる。

第一に、「世界大学ランキング」への関心は高等教育の国際化に伴う、ひとつの社会現象としてとらえることができる。経済のグローバル化と高等教育の国際化が進むにつれ、高等教育機関の間には、さまざまな新しい競争的環境が生まれつつある。「リーグ・テーブル」や「ランキング」自体は昔からあるが、ここ数年でその数・社会的な関心ともに急速に伸びている。国際的な学生の獲得、教員の獲得、研究者の獲得、そして資金源の獲得など、これらの国際的な競争が高まるにつれ、これらの情報をシステムティックに反映する「リーグ・テーブル」や「ランキング」に関する世界的な関心は高まってきた。知識社会における大学の役割が注目される中、これから大学に進学する学生やその家族、大学卒業生を雇用・大学に委託研究をする企業、大学に職を求める研究者、大学の教職員、各国政府が、世界中の大学を「リーグ・テーブル」や「ランキング」を通じて比較できるわけである。国際的な学生や研究者、教員の移動も、一部の大学ランキングに反映されている。THES ランキングをみると、教員がもっとも国際的に雇用されているのが、City University of Hong Kong で、これにロンドンのLSE(London School of Economics and Political Science)、スイスのETH Zurich やシンガポールの Nanyang 工科大学が続く。教員の国際化ではトップ20のうち、11(うち6機関がスイス)がヨーロッパの高等教育機関が占めている。学生の国際化という指標をみると、LSE がトップで、イギリスの他、ヨーロッパの大学が健闘している。オーストラリア、シンガポールも上位を占める。国際化についてみると、アメリカの大学は上位にはあまりない。日本の大学の場合、研究者によるピア・レビューのスコアは高いにも関わらず、教員、学生共に国際化についてのスコアは押しなべて低い。

第二に、「大学の国際化」と「ランキング」の間には、政策と、大学機関の戦略レベルにおけるつながりが見られる。大学のマネジメントに関わる人々(学長や副学長、事務局長、学部長ほか行政に携わる教職員)にとって、「ランキング」の情報をいかに活用するかは、それぞれの機関の今後にとって、両刃の剣といえる。ランキングの結果は、大学の広報活動に役立ち、大学全体のミッションや、個別のプログラムなどに関する宣伝効果が期待される一方、これらのランキングによる情報は、大学の外から、それぞれの目的にそって大学を差異化しているものであって、大学の使命や戦略、意思を必ずしも反映したものではない。国際化という観点からいうと、多くの国の大学にとって、海外からの留学生の獲得は、授業料獲得による大きな収入源とみなされる。また、国内での公的資金の制約を背景に、高等教育機関の中には、国境を越えた高等教育の提供など、国際市場に活路を求めるケースも増えている(OECD, 2004)。また、知識社会における大学の研究開発能力の活用という観点から、各国政府は、「国際的に競争力のある研究大学」のための政策的支援を政治的課題としている。このような「大学の国際化」の文脈において、「ランキング」、「リーグ・テーブル」は社会現象であるのみならず、政府による資金配分や大学機関にとっての資源と名声獲得のため

の戦略的な「ツール」としても機能する。⁴ 今後さらに、「ランキング」を意識した、各国の戦略や、大学機関レベルの戦略やマーケティング活動、どのようにしたらランキングがよりよくなるか、といった研究が活発化することは想像に難くない。

このような文脈において、大学の「ランキング」、「リーグ・テーブル」を、国際的な観点から、比較検討しようとする動きが研究者や国際機関などを通じて過去数年の間に見られる。たとえば、今回のシンポジウムのスピーカーの一人、UNESCO/CEPES(ユネスコ ヨーロッパ高等教育センター)の所長Dr. Jan Sadlakは、2002年から数回にわたり、ランキングに関する専門家によるセミナーを国際的に組織し、大学ランキングの方法論についての議論を重ねている(Merisotis, 2002; Merisotis and Sadlak, 2005)。⁵ 各国の研究者による、ランキングの方法論と使用に関するさまざまな問題についての指摘も多くなされている。例えば、Altbachが最近の論考において、「市場的で競争化した21世紀の高等教育の世界において、ランキングは避けられないものであり、必要なものである」、と論じたうえで、国内のランキングにも問題があり、国際的なランキングはさらに問題点があること、そこで「いかに正確で、文脈に適合した指標を用いて、必要とされるランキングを行うかは大きな挑戦である」と結んでいる(Altbach, 2006)。また、オーストラリア、イギリス、カナダ、アメリカ合衆国における5つの大学ランキングの国際的な分析から、政策的含意について論じたDill & Soo (2005)も、特に参考になる文献としてここにあげておきたい。

今回のライデン大学におけるシンポジウムの問題意識も、これらの背景との関連で、よりよく理解されよう。今回のシンポジウムにおける基本的な問題意識は、以下のようなものである。

- 1) どのような基準にもとづいて、世界大学ランキングが可能になるか。
- 2) そもそも、このようなランキングはどのような目的に沿って行われるべきなのか。

今回のシンポジウムの中で、興味深かったプレゼンテーションは、ドイツにある非営利組織 Center for Higher Education Development (CHE) のProf. Dr. Detlef Müller-Böling によるものである。CHEランキングはDIE ZEIT という新聞で公表されている。CHEランキングの手法は、学生による多様なニーズを優先して作成されているという点である。個人個人のニーズにより、大学をグループ化したランキングが可能になるという、他の大学を個別に序列化する「大学ランキング」とは異なる性格を持っている。⁶ ドイツのみならず、オーストリアなど、ドイツ語圏の大学がメンバーとして参加しており、英語でウェブサイトへのアクセスが可能であり、留学生に対するドイツ語圏の大学に関する情報提供という目的、ドイツ語圏の大学への留学生獲得という共同マーケティングの意識が強く出ていると思われる。「国際化」という観点も、インディケーターとして考慮されている

⁴政府関係者にとって、公的資源の配分にあたり、ランキングやリーグ・テーブルの結果は、ときに影響を与える。たとえば、英国の研究や教育に関する公的な評価結果は公表されているが、それは大学機関への資金配分に影響を与える。また、多くの国にとって、大衆化が進む高等教育セクターにおいて、高等教育システムの「多様化」は、避けられない課題である。高等教育機関の機能分類(classification)とその公的評価システム、商業的メディアを通じたランキング情報の用い方には、さまざま利害が絡む。

⁵2002年6月ポーランド、ワルシャワにおける国際会議、2004年12月ワシントンにおける会議などがある。これらの結果については、*Higher Education in Europe*, Vol.27, No4, Vol.30, No2において特集号として紹介されている。2006年5月には、ベルリンで専門家会議が予定されている。

⁶CHE/ DIE ZEIT ランキングの方法論については以下を参照のこと。

<http://www.daad.de/deutschland/studium/hochschulranking/04690.en.html?module=Show&tmpl=e2>

(Federkeil, 2002 も参照)。オランダ政府による同様の試み、www.studiekeuzel23.nl/frameset.asp がオランダ語版しかない、というのと対照的であった。オランダのTwente大学、Prof. Marijk van der Wendeによる発表も、国際化とランキングに関する理論的背景と、オランダとドイツの対比という観点から参照されたい。

国際化という観点からいうと、ヨーロッパにおける、学生や研究者の国際的流動性に関する各種の試みが、ゆっくりではあるが、実を結んでいることが、いくつかのランキングの指標から明らかになってきているという点が興味深い。大学は、中世以来、もともと国際的な存在であるが、制度としての大学の国際化は、多大な時間と、工夫を要する企図である。CHE/ DIE ZEIT ランキングの例に見られるような、非英語圏の複数の国の大学が参加し、学生のニーズを中心にすえた、それ自身が国際化のためのプロセスになりうるランキングのシステムが特に印象的であった。これらの既存のシステムとの交流を通じて、多国間、多地域間でのシステム形成も今後可能であろう。

大学の世界ランキングは可能か。その答えは、さまざまな形のランキングが可能である、ということであろう。一方で、完璧なランキングの指標というものは存在しない。ランキングに関する方法論的な問題点は繰り返すまでもないが、結局のところ、ランキングの用い方は、それぞれの大学や個人の目的次第である。ランキングの順位は、大学関係者のみならず、社会的に常に興味深い議論を誘引する。大学の世界ランキングに関するこのようなイベントが開かれ、ランキング関係者や大学関係者がそれぞれのランキングの異なる目的や機能、それらの補完性を意識することは意味がある。一方、ランキングによる危険性は、大学の活動が、ランキングの結果を意識した結果、本来のミッションや目的から逸脱してしまいかねないという点であろう。ランキングの数字を過信することは、非常に危険であり、多くの場合、生産的ではない。現在必要なのは、大学を「グローバルな」組織として、それぞれの文脈において位置づけうる、ランキングに関する方法論、目的、哲学、マーケティングを含めた、創造性ではないだろうか。

Leiden 大学 シンポジウム ウェブサイト

<http://www.leidenslatest.leidenuniv.nl/index.php3?m=5&c=51#presentations>

参考文献

- Altbach, Philip G. (2006) 'The Dilemmas of Ranking', International Higher Education, no. 42, winter. http://www.bc.edu/bc_org/avp/soe/cihe/newsletter/Number42/p2_Altbach.htm
- Dill, David D. and Maarja Soo (2005) 'Academic quality, league tables and public policy: A cross-national analysis of university ranking systems', in *Higher Education*, vol. 49, p495-533.
- Federkeil, G. (2002) 'Some Aspects of Ranking Methodology- The CHE-Ranking of German Universiteis' in *Higher Education in Europe*, Vol.27.No.4. pp.389-397.
- Jobbins, D. (2002) The Times/The Times Higher Education Supplement- League Tables in Britain: An Insider's View. in *Higher Education in Europe*, Vol.27.No.4. pp.383-388.
- Jobbins, D. (2005) 'Moving to a Global Stage: A Media View' in *Higher Education in Europe*, Vol.30.No.2.
- Merisotis, J.P. (2002) 'Summary report of the invitational roundtable on statistical indicators for the quality assessment of higher/tertiary education institutions: Ranking and league table methodologies' in *Higher Education in Europe*, Vol.27.No.4. pp.475-480.
- Merisotis, J.P. and Sadlk, J. (2005) 'Higher Education Rankings: Evolution, Acceptance and Dialogue' in *Higher Education in Europe*, Vol.30.No.2.
- OECD (2004) *Internationalisation and Trade in Higher Education: Opportunities and Challenges*. Paris: OECD.
- Van Dyke, N. (2005) Twenty Years of University Research Cards, in *Higher Education in Europe*, Vol.30.No.2.
- Yonezawa, A., Nakatsui, I., and Kobayashi, T. (2002) 'University Rankings in Japan' in *Higher Education in Europe*, Vol.27.No.4. pp.373-382.